

田川×台湾

日台交流シンポジウムで絆を深める

1月20日、田川メディカルセンターで、日台交流シンポジウム「日本と台湾の〈記憶〉遺産」が行われ、市内外から約80人が参加しました。

なぜ「田川」で「台湾」との交流事業が催されるのか。その背景には、明治28年以降、日本の統治下に置かれた台湾に多くの日本人が移住した時代に、本市に所在した三井田川鉱業所から台湾の炭坑に技術者が赴任するなど、石炭を介した交流の歴史があります。また、石炭産業の衰退とともに風化していたこの歴史が息を吹き返すきっかけのひとつとなった出来事が、田川が世界に誇る「山本作兵衛コレクション」のユネスコ「世界の記憶」への登録なのです。

こうした歴史をひも解き、かけがえのない〈記憶〉遺産を学び合おうと開かれたこのシンポジウムのために、台湾の官僚や大学教授、博物館長など5人が来日しました。はじめに施國隆文化局文化資産局長と林寛裕新北市政府文化局長、王新衡国立雲林科技大学助理教授が登場し、それぞれ台湾の産業遺産の特色や保存と活用のあり方などについて講演。日本統治時代の鉱山などが観光などに利用されている事例を紹介した林局長は「最も重要なことは、現存している遺産の保存と活用。このことが台湾と全世界をつないでいくことを期待しています」と訴えました。続く「日台の〈記憶〉遺産と博物館」と題したパネルディスカッションでは、市石炭・歴史博物館と親交の深い台湾の博物館長や学芸員がパネリストとなり、歴史遺産の継承と博物館の役割などについて、意見を交わしました。

また、シンポジウムの開催に合わせて王助理教授と龔俊逸新平溪煤礦博物園區總經理に「たがわ魅力向上大使」が委嘱されるなど、お互いが絆を深め、交流の歴史が新しい局面を迎える契機となりました。



▲二場公人市長(中央)から「たがわ魅力向上大使」の委嘱を受けた王助理教授(左)と龔總經理(右)



▲台湾の産業遺産の特色を解説する施局長



▲活発に意見を交わす日台のパネリスト



▲二場市長を表敬訪問する台湾関係者



▲シンポジウムをきっかけにさらなる交流が期待されます

TOPICS

新風を運ぶレイルウェイ

平成筑豊鉄道と台湾鐵路平溪線が
姉妹鉄道の協定締結へ



平成筑豊鉄道株式会社では、沿線人口の減少に伴う利用者の減少に歯止めをかけるため、国内外から観光客を誘致し、鉄道を活性化させ、地域振興につなげる取り組みを推進しています。

この一環として、平成筑豊鉄道と同じ石炭運搬の歴史をもつ台湾鐵路平溪線と姉妹鉄道の協定を締結することが決定しました。平溪線の十分駅近くには、市石炭・歴史博物館と平成28年10月に友好館を締結した新平溪煤礦博物園區があるなど縁が深い路線です。姉妹鉄道協定の締結式は本年5月19日(土)に実現します。以降は相互に利用客を誘致する企画を打ち出すなど、さまざまな手法で沿線の活性化を図ります。

●問い合わせ 平成筑豊鉄道(株) (☎22-1000)

◆問い合わせ 市石炭・歴史博物館 (☎44-5745)